

## 地域のことが気になり始める季節

3月の初めから道の角々に市議会議員のポスターが目立ち始め、統一地方選挙が近いことを知らせている。世代が交代して、市長や議長の子息がにっこり笑ってこちらを見ている。里山の団体に足しげく通って顔を売っていた候補者が朝立ちで道行く人に挨拶しているのを見かけた。一番身近な議会の選挙の投票率が低調なのもなぜなんだろうとずっと昔から思っていた。

話変わって、先日古墳をめぐるツアーに群馬県を訪れた。行きのバスの中で上毛かるたに話が及んだ。県の出身者は70代になっても子どものころに覚えたかるたの一節はとめどなく出てくるといふ。

上毛かるたの誕生は1947年で、1948年には第一回のかるた選手権が行われたというから、その歴史は74年にもなる。売上販売数は154万組を超えている。その昔は県内各市町村で独自のかるたが作られたというから驚きだ。

かるた大会は大人部門、小学生低学年、小学生高学年などに分かれて競い合う大会で、本気モードの大会のようだ。最初はいつも「つる舞う形の群馬県」から始まるという。バスツアーに予定していた大室古墳群は「しのぶ毛の国二子塚」というかるたになっていた。

群馬と言えば、上毛三山。赤城山、榛名山、妙義山が著名だが、この札を取った者は点数が少し高いそう。草津の湯で名高い温泉や世界遺産になった富岡製糸場、歴史上の人物新田義貞、県出身の著名人、新島襄、田山花袋もかるたに読み込まれている。

極めつけは「力あわせる200万」だ。県が目指そうとする人口数を読み込んで、「自分たちの群馬県」、県民の一つのアイデンティティになっている。

県内小中高の運動会、紅白に分かれるのではなく、群馬では赤城団、榛名団、妙義団に分かれるという。もう一つの団が欲しい時には浅間団が加わるという。

大室古墳群でもボランティアガイドさんは、上毛かるたに謳われた…と解説を始めるし、で群馬県出身者はどこをとっても群馬県が出てくるのではないかと実感した。

千葉県には誇れるものがたくさんある。若い人々の間で地域の名所を発信する SNS が散見されるようになった。もちろん名所旧跡もあるが、なかには「こんなに田舎です」が関心の的になっている。まだまだ再発見できる千葉ではないか。



小二子古墳（前橋市）

（松戸市 藤田 隆）

## はじめまして

はじめまして。

2月に自然観察ちばに入会しました。



カタクリ(昭和の森 2023.3.27 撮影)

神奈川県から転居し、自然豊かで里山の風景を残す地で生活が始まって 10 年が経ちました。

生まれ育った神奈川県と違い、現住所はちょっと歩けば澄み渡る空を全周囲で見回すことができる環境で、日々散歩の楽しさを味わっています。また、四角に切り取った空や不夜城からの光に遮られる星空観察でなく、寝そべて四方の夜空を観察するという贅沢も味わっています。地元の方は、「以前は天の川が見えたけれど、子供の頃は暗すぎてむしろ怖かった。」と話されていました。自転車や車で九十九里浜に気軽に出かけられる距離なので、広い砂浜で広大な太平洋を眺め波と戯れ、時には漁協直売所で新鮮な魚を購入して味わったりしています。

35年間の集合住宅生活を経ての生活なので、庭の樹木や果樹、菜園管理が面白くまた大変でやっと慣れてきた昨今です。ハクビシンやアライグマは、当地で生活を始めた頃から出現していましたが、最近住居近くにイノシシが出現するようになり、新たなステージに入ったかの感があります。



ホタルカズラ(昭和の森 2023.3.27 撮影)



タチツボスミレ(昭和の森 2023.3.27 撮影)

以前から夫婦で参加している活動に、「オオカミ再導入活動」があります。

神奈川県丹沢地域での森林保全ボランティア活動に参加すると共に、全国のシカ・イノシシ等による里地里山・奥山の獣害地域の現地観察、現行の対策を補う対策として自然生態系・食物連鎖の観点からの頂点捕食者オオカミの不在について、専門家の元で賛同者達と共に 20 年近く学びつつ、普及啓蒙活動を続けています。



東金市こども科学館



千葉市動物公園 zoo フェスタ

「なぜそのような活動を始めたのですか」と聞かれることがあります。

それは若い時、登山や植物観察を楽しんだ景観があり、様変わりした惨状を各地で見たからです。

そして、現行の対処的な対策だけでなく、大型の捕食動物が絶滅した日本の自然生態系を根本的に考察して実行していかなければ解決しない問題だと受け止めたからです。人口減少・少子高齢化・過疎地や限界集落の拡大が言われて久しく、若い世代に田舎への移住をすすめ、狩猟者育成や狩猟資格取得の事業、ジビエの推奨等を進めています。今後も推進されていくと思います。

欧米でも人や家畜の敵や狩猟対象として頂点捕食者オオカミが駆除され、絶滅した国々があります。しかし、その後科学の進歩でむしろ大型肉食獣の存在が自然生態系には非常に大切であることを世界の多くの科学者達が立証し、各国が法律で保護し、オオカミ再導入と導入後の保護政策がとられ、現在も継続しています。

多くの人が懸念する家畜への被害は、オオカミの行動研究により理解が進むことで被害が抑制されて人との共生が選択され、近代化や補償制度の充実で対応。人身への被害は、記録の多くがオオカミは危険動物との偏見に基づく誤報であったので、「餌付けの危険性」と野生動物に対する知識と理解を地道な啓蒙普及活動を教育現場で行い、大型肉食動物の重要性を理解する野生動物の専門家の育成、自然環境の調査研究等、絶滅させるのではなく多様な生物との共存の道を選択し、今に至ります。

日々の生活で人間優位の自然観を持ちがちですが、自然からの恩恵を受ける一員として人間社会が存在する事を学び、自然を大切にして次世代に残せる努力をしていきたいと願っています。

大網白里市 井上千代子



千葉市民活動フェスタ



県立いすみ環境と文化のさとセンター



# 椿を訪ねてお馬鹿な旅①

五島列島 福江島の玉之浦



五島が世界に誇る幻の椿"玉之浦"。赤い花卉を白く縁取ったその姿は艶やかで、とても印象に残るものです。この"玉之浦"の発見は偶然でした。炭焼を生業としていた故有川作五郎さんがいつものように山(父ヶ岳、七ツ岳)に入ったところ、そこには見慣れた椿とは違う、美しい花がありました。それこそ幻の椿"玉之浦"だったというわけです。昭和22年のことです。

五島市になる前、旧町名で「玉之浦」がありました。その玉之浦町長だった故藤田友一さんが"玉之浦"を世に広めた人です。

町民からの信頼も厚く、24年の長きにわたり町

長を勤めあげた藤田さんは、余生の楽しみは山歩きで、凜と咲く椿に心をひかれていったのです。

そんな折、昭和48年長崎市で全国椿展が開かれることとなり、藤田さんにも出品の依頼がありました。

藤田さんは満を持して"玉之浦"と名付け、自身の逸品を出したのです。

"玉之浦"は紹介されるや否や、瞬く間にツバキ愛好者の知るところとなりました。人間には作り出すことのできない、夢のような美しさの花だったからです。しかし、その人気ぶりは"玉之浦"にとって災いをもたらすものでした。たくさんの人が一儲けを企んで、挿し木や接ぎ木の穂木にするため枝を折ったり、根を切ったりした結果、五島の山にひっそりと立っていた母木は枯れて死んでしまいました。今はその子孫が世界中の人々の目を楽しませています。(以上 五島市のHPより引用)

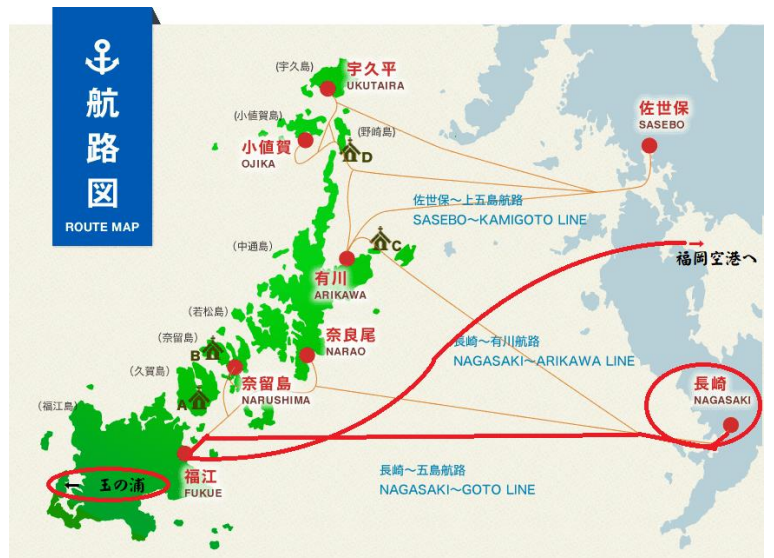
私がこの椿を知ったのは新聞で母樹が枯死した記事を読んだ時ですから昭和50年頃と思います。

自生地で母樹の花を見る夢は潰えましたが、聖地を巡礼したい、人間の愚行を詫びたい気持ちが抑えきれず、五島列島まで一人で行く事にしました。

福江島に渡るには長崎港から九州商船の連絡船で3時間超かかります。最安運賃の客室に椅子は無くカーペット敷の雑魚寝スタイルで、壁際には温泉の大浴場のように洗面器が積み上げてありました。船が港の外に出ると直ぐに洗面器の役目が分かりました。苦しい船酔いの末、青白い顔で福江の港に上陸すると、市の中心部へ伸びる道路の両側に植え垂れた街路樹はヤブツバキでしたから椿の島にやっと辿り付いた実感が湧きました。

目指す玉の浦地区は島の一番奥まった所にあり、直通バスが無いので途中で乗り換えなくてはなりません。観光名所の隠れキリシタン教会もバスから遠望するだけ、海の幸が堪能できるような宿には泊まれず、単に玉の浦の地に足跡を残しただけの旅でした。往路の船酔いに懲りて帰りは福岡までの空路にしましたが、離陸直後から小型のYS-11は嵐のような風雨に突っ込み雷光にも怯え、終始揺れ通しの人生最悪のフライトでした。パイロットは操縦桿から一時も手が離せないのか機内アナウンス無し、客室乗務員も飛行中は通路を歩かず飲み物サービスも一切ありませんでした。若かりし頃のお馬鹿な旅のお話です。

佐倉市 坂本 文雄



## 4月はインコさんも忙しい

小坂 裕子(白井市)

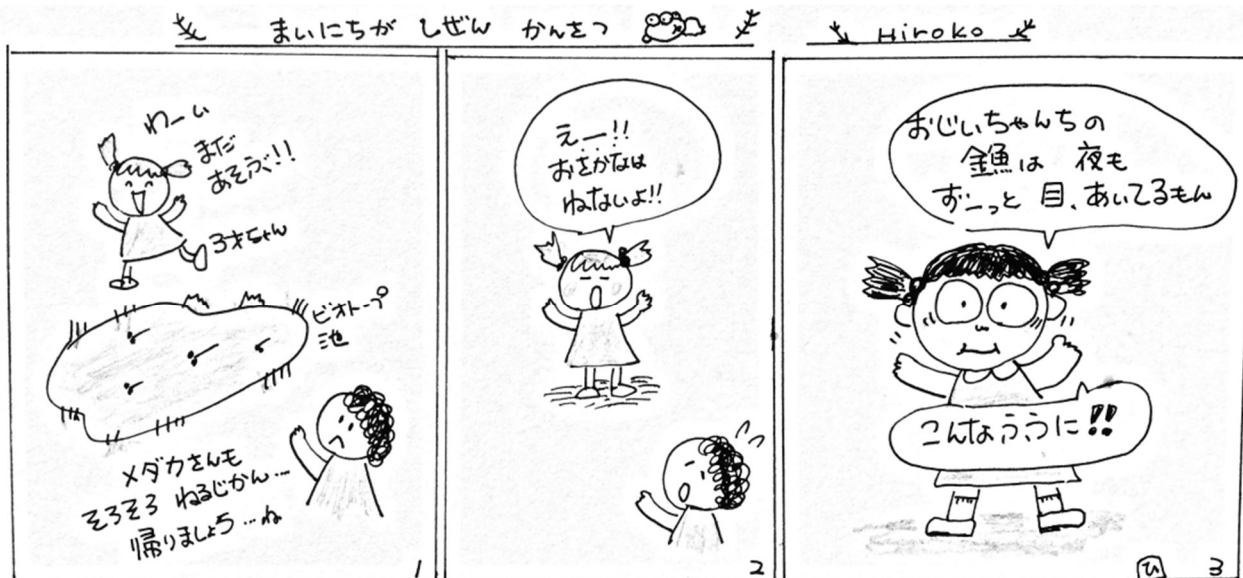
4月は新入園児さんのシーズン

生まれて初めて保護者と離れるので、一生お母さんと会えないかもレベルのテンションで大泣きしている子もいれば、数時間耐えたらお母さんに会えるのは分かっているけれど悲しい気持ちがあふれ出しシクシク泣く子もいる。または全く逆で、初めての施設の遊び道具が楽しくて帰りたくないで大騒ぎして、逃げ回る子もいる。子どもたちは大変な気持ちで過ごしているが、先生たちもエプロンのポケットにティッシュを多めに入れて、新しい子どもたちとの出会いにワクワクしながら慰めたり遊んだり追いかけたり・・・4月はとにかく忙しい。大泣きする気持ちを落ち着かせようと、あの手この手で声をかけても私に出会うのもまだ数回の子もたち。簡単には泣き止んでくれない。

そのようなこの時期に大活躍してくれるのがセキセイインコさんたちです。

インコの鳥かごのまわりには入園したばかりの子どもたちが集まり、自分の菜っ葉をインコさんに食べさせてあげたい、インコさんとお話してみたい、近くに行きたいで押しくらまんじゅうのようにギューギューしている。

大泣きしていた子に菜っ葉を渡すとギューギューのなかに入り込み、カゴに差し入れた菜っ葉をインコがチクチク鳴きながら食べてくれた瞬間、私を見上げ、うれしそうに笑顔。いつの間にか涙は、とまっている。



出会った3～6才ごろの子どもたちとの実際の出来事を漫画にしています。



## 植物雑感『染井吉野』：ソメイヨシノ：バラ科サクラ属 (Cerasus yedoensis)

今月は4月ですので、桜について書いてみました。桜は菊と並んで日本の国の花に指定されています。昔から日本人は桜が好きで花と言えば桜をさす程です。花の色とか形など清楚な姿から、満開の豪華さと美しさが感動を与えてくれる素晴らしい樹木であり、花であります。

サクラの種類は500種以上あると言われています。その中でも日本各地に植えられ、誰もが桜の代表として、親しみ、愛されているのが、染井吉野です。染井吉野の花は葉が出る前に花が群がって咲き、樹形が横に広がるために樹全体が花に埋もれ、絢爛豪華が身上です。加えて成長が早く、どんな土地にも馴染み、病虫害にも強く、花の満開時には卒業や入学など記念の行事とあいまって、北海道から九州まで、時期のずれはありますが、一斉に花が咲き多くの人を楽しませています。

既にご存知とは思いますが、日本の桜には自生種が11種あります。沖縄が生育地の早咲きのカンヒザクラがあり。昔からは桜といえばこの種が主体で温暖帯が分布域のヤマザクラがあります。東北、北海道では紅色のオオヤマザクラ。山に入ればカスミザクラが幾らか遅い開花です。房総、伊豆地方にはオオシマザクラ。最近自然種に指定された紀州のクマノザクラがあります。全国的に長寿で大木になるのはエドヒガン。富士山周辺にはマメザクラ。溪流沿いにはチョウジザクラ。山地にはタカネザクラとミヤマザクラがあります。(カンヒザクラは自然種でないとする説の学者もいます)

これらの自然種が混ざり合い、多種多様な桜が生まれました。その中でも一番の絶世の美人が染井吉野だと思います。江戸時代末期に江戸の染井村から「吉野桜」として売り出されたのが始めです。明治10年代に、国立帝室博物館職員の藤野寄命氏が上野公園の桜を調査され、吉野山のサクラとは異なる種類であることに気づき、吉野山の桜と区別するため、発祥の地にちなみ「染井吉野」と命名して、明治33年「日本園芸雑誌」に発表されます。翌年に東京帝国大学の松村任三教授によって *Prunus yedoensis* の学名がつけられ、染井吉野の名が認知されます。中央集権の国家体制の確立の時期と合わさり、東京生まれの樹木が、学校や神社、公道など広い公の場所に相応の樹木として選択され、全国に爆発的に増加したと想像されます。(「桜」：勝木俊雄から抜粋・加筆)

染井吉野が認知された後に、植物学者が様々な調査を始めます。誕生について、韓国の済州島だという説、伊豆大島で自然発生で出来た説から、伊豆半島あたりで自然交雑で生まれたものを染井村の植木屋が持ち帰った説、また染井村の植木屋の伊藤伊兵衛政武の所で人工交配にて作り出したという説など、色々な説があります。戦後になってから国立遺伝研究所の竹中要博士は染井吉野を追っかけ、早熟で成長が早いこと、種子をつけない事などから雑種であると推定し、実験的に取り組みを進めた結果、染井吉野はエドヒガンが母親でオオシマザクラが父親だと立証しました。しかし発生については、未だに謎です。考えられるには、染井村の植木屋には各地から桜の苗が集まり、その中から何らかの条件でエドヒガンとオオシマザクラとの交雑種ができたものではないかと思われます。

染井吉野は接ぎ木で増やされ、全国に広まりました。その結果は全ての染井吉野はクローン種でDNAで調べても全く同じです。

小島紀彦(我孫子市)

「清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき」  
与謝野晶子

